

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：22604

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580004

研究課題名(和文) 内的表象の言語化:意味論の再構築

研究課題名(英文) Verbalization of Internal Representations: Rebuilding Semantics

研究代表者

松阪 陽一 (Matsusaka, Yoichi)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：50244398

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：主体がもつ心的内容、そしてその発話のプロセスを解明することを通して、言葉の意味を明らかにすることを目指した。そのための基礎研究として、固有名がどのようにしてその指示を獲得するのかを、主体が内的表象をどのようにして獲得し、またその内容を経験に応じて改訂していくのかという過程に注目することで、明らかにしようとした。

また、本研究の副次的な産物として、後期ウィットゲンシュタインが「規則に従うこと」に関して行った考察の一部が、現代の認知科学や機械学習で研究されているパターン認識の問題と深いつながりをもつ、という見解を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：In this study, I aimed to clarify the meanings of an utterance by elucidating the process through which the speaker verbalizes the mental content she wishes to express by the utterance. As a basic research to that end, I tried to clarify how a proper name acquires its reference by paying attention to how the subject acquires, and they revises, the internal representations of the referent of the name. In addition, as a secondary product of this research, I came to have the view that part of the considerations made by the later Wittgenstein on "following rules" is deeply linked to the problem of pattern recognition, widely studied by modern cognitive science and machine learning.

研究分野：言語哲学

キーワード：哲学 西洋哲学 言語哲学 意味論 語用論

1. 研究開始当初の背景

現代の形式意味論では、自然言語の表現の意味を分析することは、その表現がもつ意味論値(外延、内包)を与えることによってなされ、特に、平叙文の意味は、その要素となっている表現の意味論値からその真理条件を特定することによって与えられる、と考えられている。しかし、「私」、「今」、「ここ」といった指標詞は、その発話者や発話の時点、場所に関する情報抜きで、その意味論値を端的に指定することはできず、カプラン("Demonstratives", 1977)は、指標詞を含む文の真理条件を文脈(context)に相対化することで、こうした表現を含む文に対する意味論を与えたのであった。しかし、カプラン自身認めているように、こうしたアプローチには限界があり、「これ」や「あなた」、「彼」といった直示詞、二人称、三人称代名詞を適切に扱うことができない。

申請者自身、意味論と語用論の境界(「指示と意図」、『岩波講座哲学3』2009)、直接話法に対する意味論的分析(A Theory of Direct Discourse: Its Semantics and Pragmatics, Ph.D thesis, UCLA, 2013)について考察してきたが、その過程で、現在の意味論の枠組みには深刻な欠落があると信じるに至った。特に、現代の形式意味論では、人称代名詞や、「行く」と「来る」、「やる」と「くれる」のような視点依存的な表現に対してどのような扱いを与えるべきなのかが定まっておらず、このような表現に対して無理のない分析を与えようとする枠組みを用意することが必要であると感じられた。

2. 研究の目的

現代の意味論は、文が発話された結果、それがどのような真理条件をもつのかは扱うものの、それがどのようなプロセスを経て発話されたのかは扱わない。しかし、アリストテレス(『命題論』)以来支配的であった見解に従えば、そもそもたんなる音声である発話が意味をもつのは、それが話者の何らかの内的表象状態を外化しているからに他ならない。その際、言葉の意味とは、話者が内的状態を言語化(verbalize)する際の規約に求められることになるだろう。本研究の目的は、こうした伝統的な意味理解に基づいて、意味論を再構築することにある。

その際、特に重要となるのは、内的表象がそもそも「表象」、すなわち何かを表すものとなるのはなぜか、そして、言語的表現は如何にして内的表象からその表象機能を受け継ぐのかの解明であろう。こうした事柄を明らかにし、指標詞や人称代名詞、「行く」や「来る」といった視点依存的な表現の意味論をより深いレベルから再構築することを目指した。

3. 研究の方法

本研究は、最終的には人称代名詞を始めとする、様々な「視点依存的」表現の意味論を内的表象の言語化という観点から作り直すことにある。しかし、こうした研究は、内的表象が如何にして外的事物を指示するのか、そしてまた、そのような内的表象と言語表現の間にはどのような関係が成立するのかを明らかにしない限り、説得力をもつことはないだろう。こうした観点から、本研究では、従来言語哲学で膨大な議論が費やされてきた固有名を題材にとって、固有名の指示を内的表象の指示という観点から理解できないかを研究した。

その際、報告者が参考にしたのは、現代の認知科学での概念モデルや、機械学習での概念習得モデルである。これらのモデルの特徴は、個体や事物の現れが相互にもつ類似性に着目する点である。たとえば、事例モデルでは、概念は事例(典型的には知覚イメージ)の束、集まりとしてモデル化され、個々の対象の概念は、その対象が主体に提示する知覚経験の束としてモデル化される。すると、日常に於ける対象の再同定は、現前する対象が主体に提示する知覚像が、その主体がもつ知覚経験の束のどれと最も強い類似性を示すのかに基づいてなされることになるだろう。この観点こそが、従来の言語哲学や意味論において決定的に欠けていたものであるという認識のもとで研究に取り組んだ。たとえば、クリプキは彼の有名な記述説批判において、固有名の指示を決定する際に記述が果たすべき役割を、対象が当該の記述、あるいは記述の「束」を満たすこと以外に求めてはいない。しかし、記述が、かりにその対象を正しく記述していなくとも、その対象が示す諸特徴と一定の類似性を示すのなら、それは主体にとってその対象を再同定する際に大きな助けとなる可能性がある。こうした観点に立てば、固有名の指示対象の決定の際に記述の果たす役割を、その対象を正しく記述することではなく、むしろパターン認識を可能にする材料を提出することにあるという見解がありえる。このような観点から、伝統的に指示の問題を再考する余地があるのではないかとの認識で、従来の内包・外延の概念や論理的推論を中心にした分析手法ではなく、類似性や蓋然性を中心にした分析の可能性を追求した。

4. 研究成果

固有名の指示については、心理学で提唱されている「事例モデル」を例に取り、概念の改訂過程に着目することで、如何にして概念が世界の中に存在する事物を表象すると言えるのかのモデルを提出した。その際報告者が提出したのは、「言語的事例」という概念であり、これは主体がどのようにして純粋に

言語的な学習を通して新たな概念を獲得し
うのかを説明することを目指したもので
ある。その過程で、知覚がもつ志向性を前提
にすることで(すなわち、われわれが世界に
存在するものを知覚することができるとい
うことを前提にすることで)、主体の持つ概
念が「ある対象に関して志向的に安定してい
る intentionally stable with respect to
an object」という概念を取り出し、この概
念が、日常的な意味での「指示」の概念が果
たす役割と類似の役割を果たしえることを
論じた。この成果の一旦は、国内外の学会、
コロキウムで発表され、*Lecture Notes in
Artificial Intelligence* シリーズの一部と
して出版される予定である。

また、これは当初の予定にはなかったこと
であるが、本研究の遂行過程において、類似
性に基づく認知は、後期のワイトゲンシュタ
インが「規則に従うこと」に関して行った有
名な一連の議論と深い関係をもつというこ
とが、次第に報告者に明らかになったこと
となった。これは、通常のワイトゲンシュタ
イン解釈で強調されることはない観点であるため、
2016 年度の日本科学哲学学会のシンポジウム
提題において、この観点を提示した。

<引用文献>

- ① David Kaplan, “Demonstratives”, in
Almog et al. (eds.), *Themes from Kaplan*,
1989, Oxford University Press.
- ② 松阪陽一、「指示と意図」、『岩波講座哲学
3』、岩波書店、2009.
- ③ Youichi Matsusaka, *A Theory of Direct
Discourse: Its Semantics and
Pragmatics*, Ph.D thesis, UCLA, 2013
- ④ Saul Kripke, *Naming and Necessity*,
Oxford University Press. 1972

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① Youichi Matsusaka, “Reference and
Pattern Recognition”, Setsuya
Kuharahshi, Yuiko Ohta, Sachiyo Arai,
Ken Satoh and Daisuke Bekki (eds.), *New
Frontiers in Artificial Intelligence,
JSAI-isAI 2016 Workshops, Revised
Selected Papers: 64-74. Lecture Notes
in Artificial Intelligence (LNAI)*,
volume 10247, Springer. [査読無]

[学会発表] (計 3 件)

- ① Youichi Matsusaka, “Reference of Proper
Names and Pattern Recognition”, Reed
College Philosophy Colloquium
(Portland, Oregon), 2017 年 3 月 3 日

- ② 松阪陽一、「規則とパターン：後期ワイト
ゲンシュタインの洞察」(シンポジウム提
題)、日本科学哲学学会第 49 回大会(信州大
学)、2016 年 11 月 19 日

- ③ Youichi Matsusaka, “Reference and
Pattern Recognition: A Metasemantic
Study”, *Logic and Engineering of
Natural Language Semantics 13* (Keio
University), 2016 年 11 月 14 日

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

なし

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者
松阪 陽一 (Matsusaka Yoichi)
首都大学東京・人文科学研究科・教授
研究者番号：50244398

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()

研究者番号：

(4) 研究協力者 ()